

# 立命電友会

## 小原先生追悼

### 小原誠先生を偲ぶ



名誉教授小原誠先生が、昨年末十二月十八日逝去された。享年九十四歳であった。

先生は、一九三四年京都帝国大学工学部電気工学科を卒業後、株式会社島津製作所に就職され研究部の技師として医療用X線装置の開発を担がされた。戦後は株式会社大雅堂企画部、ホテル・ラクヨウ技術部長、株式会社大阪レントゲンを経て、一九五二年四月に立命館大学より理工学部教授として招聘、着任された。当時本学理工学部は戦後の学制

小原先生のご研究は、医療用X線装置の技術開発とかかわって経験された高電圧機器の事故分析より始まり、その理論解析と対策を一般化することになった。その成果は「擾乱波による電機焼損防止法」の学位論文としてまとめられ、京都大学から工学博士の学位を授与されている。

私が本学の理工学部電気工学科を卒業して助手として採用されたのは、修士課程が設置されて二年目であった。当時は、研究設備と名の付くものは殆どなく、講座制でないため研究体制も無に等しい状態であった。大学院のカリキュラムには特殊実験一・二がおかれていて、院生の必修科目であった。担当は大学院研究指導の教授が交代してあたられ、その実験機器の取り扱い方と整備に二名の助手が当たっていたが、私は強電系(電力・電気機器・放電)の実験を受け持つことになったので、自然に羽村先生・小原先生のご指示ご指導を受けることになっていった。

私の研究活動について、最初の手ほどきをして下さったのは小原先生である。それは先生のご専門と関係して、「三極X線管による電圧制御時のX線質と画像に関する問題」についてその計算のお手伝いをしたのが始まりであった。得られた結果をまとめて日本放射線技術学会で発表するようにと機会を与えて頂いたのである。私にとっては初めての体験であった。何しろ、内容の理解も心もとな

上に、会場が数百名の収容可能と大きく、参加者は物理関係の研究や医師・放射線技術者が多く、報告が無事終わるまで冷や汗ものであったのを覚えている。

先生は、立命館に就任される前はメーカーでのお仕事が多かっただけに、後進の指導に当たっては従来の大学の型にとらわれることなく極めて実践的で開放的であり、仕事を任せるなかで成長を促す方針を持っておられた。

先生が卒業研究や修士論文で直接指導された学生は、一・二部あわせて五百名に近い数になるが、先生の講義を受けた卒業生の集いでよく語られたのは、先生の技術現場での経験をユーモラスに漫談風に語られる姿であった。

先生は会議の席などでは強い自己主張をされる方ではなく、多くの意見を聞いて全体の意見を纏めることがお上手であったように思う。各学部教授会のもとにあった一・二部を分離して、勤労学生の教育に責任を負う組織として二部協議会が発足したのは一九六三年であったが、その実施過程においては種々の困難な問題が山積していた。その時期に二部協議会委員長として各学部間の調整を無難にこなされたのは、会議運営の手腕によるところが大きかった。先生は入試委員長、理工学部全体を統括する就職委員など学科を離れたところでの役割が多かった。特に二部学生の就職問題に関しては格別の関心を寄せられ、企業での豊

富なご経験とその人脈を活かして積極的に取り組まれていた。

先生は定年ご退職後も非常勤講師として講義を担当するかたわら多くの企業の顧問をされ、技術指導に当たられていた。堀場製作所、立石電機(現オムロン)など京都の代表的なベンチャー企業とは、設立当時から何らかの関係を持たれていたように伺っている。

新しい科学技術の動向には敏感で、現役を退かれても深い関心を寄せられていた。時たま学校に來られると、時の話題に興じられ教えて頂くことも少なからずあった。七十歳も後半を迎えておられた頃、卒業生の同窓会の席上で「今も英会話に通っている」と近況を話され、宴席のアルバイト学生と思われ、女性をつかまえて、英会話の実践でからかわれていた先生の若々しい姿が目につかぶ。

学生時代はボート、サッカー、スキーなどのスポーツに親しまれ、立派な体躯にしては身のこなしは軽快であった。特にダンスはお得意で二次会では軽快なステップを披露されていた。

告別式で先生のご遺影を拝したとき、「辻村君まだできないの」と締切り間近の原稿を気にして頂いたお言葉が耳に聞こえる気がして目頭が熱くなった。先生のご冥福をこころよりお祈りする。

辻村 寛(昭和二十八年卒)

当世学生気質

— 定年退職のご挨拶に代えて —

岩崎博

私はこの三月、本学における十年間の勤務を終え、退職いたしました。この年月の間、多くの方々と交流し、充実した毎日を送り、数々の思い出を作ることができましたことに感謝しております。振り返りますと、私は東北大学、高エネルギー物理学研究所そして本学と通算四十六年にわたり研究・教育の仕事に専心したことになり、その結果、企業という社会において重要な位置を占める分野での経験をまったく持たないまま今日に至りました。その意味で社会全般に及ぶ視野を持たない人間で終わりそうですが、反面、研究とは何か、教育はいかにあるべきかについては人一倍の観念と認識を身につけることができました。本学を去るにあたり、高度成長期からデフレ沈滞期におよぶ長い年月の間、国立と私立の大学で学生との多様なふれあいを通じて得た若者の気質の変遷について、私なりの感想を以下に述べ、皆様のなんらかのお役に立てればと思う次第です。

(1) 君も学生、わたしも学生、あの人も学生

この半世紀の間、若年層の人口は著しく減ったのに大学進学率は上昇を続け、いまや同世代の半数以上は大学生であると云われるよ

うになった。この変化は学生の気質に測りしれない影響を与えている。以前ならば、例えば郷里に帰ると近所で、あるいは母校で、「あの人は東京の大学に行っている」と噂され、チョッピリいい気分になったものである。自分は知識人であり、社会一般で働く人々とは異なっていて、選ばれた階層の人間だと思ってしまう、それが自然に態度、行動に現われた。社会の種々の面で適用されていた学生優遇制度、国鉄の切符の学割、映画館の入場券の学割など、がそれに拍車をかけた。したがって以前の学生の意識の底には社会が自分達に期待しており、卒業後には何らかの貢献をする義務があるという思いがあった。その反面、社会の不正に対して自分達が先頭に立って闘わなくてはならないとの自覚を持つ人が多く、それがエスカレートしていわゆる「学生闘争」になり、大学、社会に深い傷跡を残してしまった。

しかし今では大学生であることは何ら特別なことではなくなっている。近所の家庭を覗いてみると、息子や娘が大学に進学していない場合、「どうしてだろう？」といふかるのがふつうになっている。その結果、大学生であることのプライドが希薄になってしまってい

る。それだから、大学を退学あるいは休学して別のことを始めることにあまり心理的抵抗がなく、それに飽きれば大学に入り直す。アメリカの大学生に似てきたようである。一般市民と意識的に変わらなくなり、テレビなどで「あれが学生か」とあきれられるような非社会的行為がかなりの頻度で生じているのを見る。しかしながら、これらの現象が学生が悪化したことを示しているとは即断してはならない。社会が、そして大学が変わったのである。したがって大学教員は、大学とは若年層の市民が一般教養を身につけにくるところ、と考える対応する必要がある。

(2) 何のために大学に入ったのか、大学で何をするのか

近ごろのマスコミの論調をみると、学生が大学を受験し、入学しようとする目的がはっきりしない。親に勧められたから、学歴をつけようから、などが動機で、この程度だから入学した後漫然と日を送る若者が多いと嘆いている。実際、学生達と懇談してみてもこのような風潮が感じられる。マスコミは学生へのカウンセリングの必要性を強調している。それでは以前の学生はもっと目的意識を持っていたのだろうか？ 私の経験によればそうではない。一九五〇～六〇年代においても大学に籍を置いただけでわけのわからない生活をして

いる学生、就職のための条件を有利にするためというぐらゐの意識の学生がかなりいた。ただ、それらの連中の中にはしたたかな性格を持っていてのがいて、私の記憶には、寮の自室でアルバイトのおもちゃ作りに熱中し、稼いだ金で悠然と酒を飲み、世を談じていた豪傑の姿が浮かぶ。

最近の学生との対話をさらに続けてみると、大学入学の目的はあて多様化していることに気付く。四年間を有意義に過ごしたいという目的は同じであるが、「有意義」の意味がさまざまである。学業に励んで高度の知識を身につけるといふ優等生的な答えがある他に、多くの友達を作って交流の輪を広げ、人生の楽しみ方を学ぶこと、種々の経験を自由な形で積んで視野を広げること、多くの資格を獲得して将来に備えること、などなどである。ちょうど学生の服装が以前と異なって百人百色になったようにまさに多様である。また、所属学部や学科を変えたり、就職先を所属学部の専門と関係のない領域に探したりという学生が多いのが目立つのも、大学入学の目的が明確でないことと関係していると思われる。

(3) 世界は僕のために、わたしのために

少子化の結果、若年層は家庭において、そして社会において大事

にされ、可愛がられるようになった。これは子供の頃から頭に染み込んでいるので、大学に行く年齢になっても、すべての施設、制度は自分のために整えられているはずと思ひこむ。もし、それらに不都合があると不満、不平が鬱積する。これを自己中心的態度というにはあまりにも他愛ないところがあるけれども、うっかり叱ったり怒ったりすると大変なことになる。学力が不足している学生がいれば彼等を落第させるより、高校程度の内容の補習を正規の授業と平行して実施して落ちこぼれの学生が出ないように努める。これが学生の自助努力をうながすことになっているかどうか、よくわからない。大学では毎年授業に対するアンケートを学生に対して行っている。書き込みの中に「講義の内容が難しすぎるから自分らにわかるように話してくれ」というのによくお目にかかる。これに対して私は次のように答える。「わかりやすく話すのには限度がある。わかりたいと思うなら自分自身で努力しなさい。テレビ番組をボンヤリ見るような感覚で聴いてわかるような現代科学など存在しません。」

(4) 僕は何でも知っている

社会における情報化の広がり学生に別の面で大きな変化をもたらした。パソコン、電子メールなどが自由に使えるようになったことから、必要な知識・情報をそれ

らから手軽に引き出す。引き出す技術が普及しているので、ホームページを覗くことを覚えたら止められなくなってしまう。授業に関することでも、教科書や辞典などよりホームページを利用し、はるかに効率的に必要なを満たしている。就職に関しても日本中の企業の求人情報をホームページから引き出し、場合によってはその企業にメールで接触して、ついには採用内定にまでこぎ着ける。娯楽、旅行に關しても、たいていのことはパソコンで間に合ってしまう。そして今世の中で何がホットであるかをいちはやく知る。いまや学生で毎日端末に向かわないような人は皆無である。教員の側もこのような時代の流れを汲み取って学生と接しないと、大きなギャップを作ることになりかねない。

情報化の時代はまた新しいタイプの学生を生み出した。情報化の波に乗って楽しむ味を覚え、朝から晩まで端末に向い、世界を相手にメール交換をしたり、様々な情報を引き出して好奇心を満たしたりする。このような状態が続くと、しまいには部屋に閉じこもって自分一人の世界に埋没してしまうようになる。端末さえあれば孤独感がないのだから始末が悪い。アメリカにはこの種の人が多いらしく、不特定多数の人に向かってメールの洪水を流している。わが国の学生達がこのような「麻葉」に染まらないことを願う。

(5) 男女二十歳でも席を同じくす

時代の変遷を大きく感ずるのは男女の学生間の交流である。異性に對する意識の垣根が低くなり、キャンパス内で気軽に話し合ったり、ふざけあったりしている。そして好きになったり、けんかしたり、なんの屈託もない。これは大学だけにみられる現象ではなく、社会一般においてそうである。以前の大学における女子学生の存在を記憶しておられる年配の方は、大多数を占める男子学生が彼等に對して特別な感じを持って振る舞ったことを思い出されるであろう。授業において女子学生の隣に座ることに恐ろしく気をつかったものである。今はそんなことはさらさらでない。健康的で活発な男女学生の交流が見られるようになったことはきわめて良いことである。この点でもアメリカに似てきているといえよう。教員の側でも授業において、実験において、男女の差をほとんど意識しないようになった。しかし、学業に對する取り組み方において差があることに気が付く。それは概して女子学生のほうがまじめで、授業への出席率が高く、試験に際しての得点が高いので、いわゆる成績優秀者には女性が比較的多数を占めるという結果になっている。これは本学に限らず、他の大学でも同様である。授業だけがすべてではないとしても、大学の雰囲気がいかに変わって行くような予感がする。

九年間の学生生活を振り返って

立命館大学大学院理工学研究科 山内留美

立命館大学びわこ・くさつキャンパス(BKC)に入学し、早いもので九年が過ぎようとしています。BKCができて二年目から通って来ました。植栽された草木は少なく、現在ほど青々とはしていませんでした。キャンパス内の建物は立派なのですが、まだまだ設備は整っておらず、病院みたいに無機質だというのが第一印象でした。大学生活が始まってすぐに、イベント事業部という大学の公認サークルに入りました。当時の環境で学生がいかにBKC生活を快適に、そして楽しく過ごせるかということとを念頭に、いろいろな大学行事の企画、運営に取り組みました。

現在は取りやめになっていますが、衣笠キャンパスからBKCまでのおおよそ三十kmを十時間ほどかけて歩くナイトハイイクがありました。本番前の下見では、そのコースを実際に歩き、危険場所の把握や休憩場所の広さなどを確認し、どのような催し物をする事ができるかなどを検討しました。学生生活を通して講義で衣笠キャンパスに行く機会がなかったので、このような催し物が良いきっかけだったと思います。BKCとは異なる四季を魅せてくれる衣笠キャンパス

は想像通りの大学という雰囲気があり、当時は羨ましく思ったものです。今では学園祭の風物詩となっている打ち上げ花火は、学友会や消防署などとの協議を重ねながら、ようやく実行することができました。初回はさほど規模も大きくなかったですが、今では地元の方なども来られて、地域のイベントとなりつつあることを嬉しく思っています。行事の度に冊子や横断幕作成などの準備で遅くまで作業をしていたことを思い出します。また学部二回生の後期から後期課程三回生まで、キャンパスナビゲーターをしてきました。キャンパスを見学に来られる中学生から老人クラブの方々、父兄、本学卒の方々などに大学の概要や施設の説明などをしてお世話させて頂く仕事です。この八年の間に経済・経営学部の移転などと、建物や施設が増加し、その度に用途の説明などを覚え直していました。クインスタジアムの地下に保存されている木瓜原遺跡やウエストウイング、アクロスウイングの屋上からの琵琶湖の眺めなどが印象的でした。

いろいろな活動のせいか、入学してあっという間に研究室配属の時期を迎えました。子供の頃から動物の脳に興味があり、脳を測る、もしくは見るということに携わりたいと考えていました。したがって電気電子工学科で視覚の研究室があることを知り、すぐに池田・篠田(Human Vision)研究室を選択しました。物を見ることは目の役割だと思いがちですが、実際は目は視覚系の端末であり、色や形などを認識するのは大脳の役割です。例えば朝、オレンジ色の白熱灯の下で白色のシャツを着たとき、その色は青っぽい昼光色によって照明されているオフィスの下でも、夕暮れ時の夕焼け空の下でも同じ白色と判断されます。しかしそれぞれの環境で目に届いている光は物理的には異なっているのです。現在研究室では、私たちがどのように色を認識しているのかについて、照明認識視空間という概念を提案して取り組んでいます。これは人がある空間に入ると、まず、その空間がどのくらい明るく、また、どのような色の照明で照明されているのかを認識し、その認識に基づいて物の色が判断されるといえるのです。そこで私は、人は何を見ることでそこに照明があるという認識に至るのかという研究課題に取り組んできました。

実験では観測者からは気づかないように設置されたスポット照明(隠匿照明)を用いて、指標と

なる一辺四cmの正方形の灰色の紙片を照明します。例えば赤色の隠匿照明を用いると、観測者はそこに灰色ではなく赤色の紙片が在ると判断します。しかしその紙片の周囲に人形やカードなどの置物を配置すると、赤く照明されたそれらの物体を見ることで隠匿照明は隠匿ではなく赤色の照明として認識され、紙片は灰色だと判断されます。紙片の色は測色的には隠匿照明の赤色の値を示すにも拘わらず、私たちの色の認識は、照明領域に何を見るか、つまり照明をどう認識するかによって全く異なってしまうのです。ここで店舗照明によく使用されるスポット照明で考えてみます。例えば緑色の服に赤い照明が与えられている場合、服の色は物理的には灰色や黒色の無彩色に近づきます。もし消費者がスポット照明の存在を認識できていたら、赤色の照明が当たっている緑色の服だと判断します。一方、消費者が赤いスポット照明の存在を認識できていなかったら、緑色の服を灰色や黒色の服として購入することになります。このような色の違いを経験された方は多いのではないのでしょうか。このように私たちの見ている色は環境により変化しているのです。

入学当初は就職するつもりでしたが、「どうしてそこに照明があると分かるのか？」という研

究課題にとりつかれ、大学院に進学することを決めました。大学院一回生の春に初めて国際学会に参加し、多くの研究者が「目の不思議」に取り組んでいる姿勢をみて、帰国後も徐々に研究という道に興味を持ち始めました。そして「目の不思議」を追求するべく博士後期課程への進学を決めました。一つの疑問が研究の道に繋がりを、現在もその疑問への糸口を見つけようとしています。昔読んだ本をも一度読むと、昔とは異なる見解を持ちます。どうして私の今があるのかを考えると、それは疑問に対するなどを解くことにワクワクするから、つまり初心を忘れずにいることではないかと思えます。これからも大学生活で得たいいろいろな事を忘れることなく、一歩一歩進んでいきたいと思えます。最後にになりましたが、今回執筆依頼を受けることで大学生活九年間を振り返ることができました。このような機会を与えてくださったことに感謝します。また、この場をお借りして、ご指導、ご支援いただいた先生方、先輩、友人、後輩の皆様、そして家族に感謝とお礼を申し上げます。

### 同窓会便り

#### 四十六年卒業同窓会

卒業して三十二年が経ち、やっとな実現することができました。

立命電友会創立十周年記念祝賀会に参加者全員から同窓会の話題が持ち上がり数人の有志で色々と検討した結果昨年七月十二日(土)、十三日(日)の一泊で開催しました。有志幹事としては初めての試みで何人集まっていたか不安がありました。数人にmailと電話で案内をしたところ輪が広がり、遠路は広島、三重、名古屋から駆けつけていただき総勢二十名の参加を得ることができました。場所は落ち着いた語らえる温泉地ということで有馬温泉の清閑な料理旅館「楽水」に決定しました。その折には集合時間の二時間前には二人が到着、一時間前には全員が集まり開演前から盛り上がり、宴会では全員がスピーチをし、懐かしい学生時代(学園紛争等)のこと、現在の立命館大学の変貌ぶり、家族のことや仕事の活躍ぶり等々で、まだまだ若者には負けられない元気な五十歳代でありました。時間はあっという間に過ぎ深夜まで話は尽きず、非常に楽しい時間を過ごすことができました。今回は有志だけで開催した為、是非とも次回(本年予定)は全員に案内し更に多くの方に参加を呼

びかけたかと思っております。追記…同窓会の名称を「立命46電友会」と仮に決定しました。天野・萩田 記



#### 立電四一会

福田 陽一

平成十五年十一月八日(土)十六時に烏丸京都ホテルに集合、同窓会(四一年卒)を開きました。平成十四年も立命電友会創立十周年記念祝賀会の後に開いており、一年ぶりの再会の方が多く、お久しぶりで始まりました。

前田先生のご挨拶そして、乾杯と続き、会の近況報告(欠席の先生方々と欠席の同窓生の便り等)と会運営の相談(来年から二部の方々にも案内を出す、来年も同窓会の前後にゴルフコンペを計画する等)をしました。

我々の世代は、第一の人生に移った方も多く、転職や、ボランティア

活動をされている方が多く出ました。十九時に来年の再会を約して、解散しました。

二次会(祇園麦笛)では辻村先生、浦山先生等(校友会参加組)とも合流でき、カラオケ等で盛り上がりしました。

次の日は朝から雨の中、特に午前中は、霧で二、三ホールは、前方一〇メートルが見えず、珍ゴルフと成りました。懲りずに、来年もゴルフガンパロウと約束し散会しました。

- 同窓会参加者 前田稔夫先生・岩沢博治・大西和三郎・片岡正範・上林村治・久米貴夫・佐藤勲・四方健雄・島津英誉・中西恒彦・深尾貞一郎・福田陽一・松藤隆信・三輪洋敏・村田正雄・山下正之・山元隆雄 以上十七名
- ゴルフ参加者 辻村寛先生・大西和三郎・片岡正範・久米貴夫・辰巳武夫・福田陽一 以上六名



二〇〇三(平成十五)年度  
電子システム系卒業生進学・就職状況

二〇〇四年三月に卒業した院生、学部学生の進路・就職状況は別表の通りとなりました。

厳しい経済情勢を反映して、二〇〇三年一月頃には翌年度の採用計画が未定の企業が、大手で少なからずありました。しかし、やがて薄日が射し始め、学生が就職活動を行う頃には各企業の採用人数も持ち直してきました。

電子システム系学生の主たる就職先である、家電を中心とした電気業界も順調に推移しつつあります。また、不況業種といわれた半導体関係も企業の再編で一段落しましたが、パイが小さくなった感はありません。自動車関連は従来、機械系が主体でしたが、環境や安全性向上への配慮から電子化が進展し、電気関係学生への求人が増加しています。

求人数、決定者数ともにほぼ例年並で、上場企業へ多数就職しております。業種別では、電気・機械関係が圧倒的に多く、電力会社へも堅調です。自動車関係の伸びが顕著です。IT不況の影響か、情報・システム関係は減少しております。

先輩方のご支援により就職できたケースが多々ございました。ここに御礼を申し上げます。本年四月には電気電子工学科、電子光情報工学科に加えてLSI関連を中心とする電子情報デザイン学科が本学系で発足しました。今後ともなお一層、後輩への暖かいご支援とご協力を宜しくお願い申し上げます。

(就職委員 左貝潤一)

I. 卒業者・進学者・就職者一覧

(2004年3月9日現在)

	卒業者	進学者	就職者	その他(自営・専門学校等)	活動中
大学院(電気)	67	0	67	0	0
大学院(光工学)	50	1	45	2	2
電気電子工学科	135	61	60	9	5
光工学科	110	62	35	6	7
合計	362	124	207	17	14

II. 就職先一覧

(大学院修了生の就職先も含む)(順不同敬称略)

業種	企業名
電気・電子機械	アイシン精機、アドバネット、アルバック、ウシオ電機、エムオーデックス、NECティティンギ、遠藤照明、オムロン、オリオン機械、オリジン電気商事、川崎重工業、関電工、キーエンス、キャノン、キャノンシステムアンドサポート、京セラ、京都製作所、小糸製作所、コーデンシ、サンプランニング、三洋電機、澁谷工業、シャープ、セイコーエプソン、星和電機、ソニー、ソニー・エリクリン・モバイル、ソニーLSIデザイン、ソニーイーエムシーエス、ダイトロンテクノロジー、大日本スクリーン製造、タカノギケン、竹中エンジニアリング、多摩川精機、タムラ製作所、ティスコ、デンソー、東芝、東洋ビジネスエンジニアリング、豊田自動織機、トヨタテクノサービス、ニチダイ、ニッソーサービス、日本コムシス、日本信号、日本精工、日本電気、日本ロジックス、ニューリー、パイオニア、長谷川電機工業、パネフリ工業、浜松ホトニクス、菱電商事、日立製作所、日立電子サービス、日立ハイテクノロジー、富士通、富士通アクセス、富士通テン、富士通ハイパーソフトテクノロジー、富士電機、富士電機総設、船井電機、ブラザー工業、堀場製作所、松下システムテクノ、松下電器産業、三浦工業、三菱重工業、三菱電機、三菱電機エンジニアリング、三菱電機システムサービス、三波工業、村田製作所、森精機製作所、モリタ製作所、リコー、リコーエレメックス、隆祥産業、ルネサンスソリューションズ、ローム、第一システムエンジニアリング、ユーテック (84社/141名)
電力	中部電力、東北電力、北海道電力、九州電力 (4社/5名)
自動車	スズキ、トヨタ自動車、トヨタマックス、日産自動車、日産車体、本田技研工業、三菱自動車工業 (7社/15名)
鉄鋼	石川島播磨重工業、日本車輛製造 (2社/2名)
運輸・通信	KDDI、NTTコムウェア、NTTデータ三洋システム、NTTドコモ関西、イー・アクセス、サイバーエージェント、スタンダードカンパニー、東海旅客鉄道、西日本旅客鉄道、日本電波工業 (10社/11名)
建設	YKK AP (1社/1名)
情報・システム	アライドテレシス、CSK、CRCソリューションズ、住商情報システム、テック情報、デンソーテクノ、トヨタコミュニケーションシステム、日本テレコム、日本電気航空宇宙システム、日本ユニシス・ソフトウエア、バルソフトウエアサービス、日立ハイコス、富士通システムソリューションズ、プロシップ、ユニシステム (15社/16名)
その他	京進、京都新聞社、国家公務員Ⅱ種、日本タイムシェア、野村総合研究所、NOVAグループ、ノリタケカンパニーリミテッド、フィールズ、藤井大丸、メイテック、安井建築設計事務所、ヤマハ発動機、ユーハイム、四日市市総務部人事課、奈良県人事委員会 (15社/16名)

学系便り

平成十六年四月一日より、電子情報デザイン学科が開設されました。

学系の名称が、電子システム系に変わりました。

平成十六年度の

電子システム系の主な役職

電気電子工学科

学科長 高山 茂

就職委員 溝尻 勲

電子光情報工学科

学科長 笠原 健一

就職委員 齊藤 茂

電子情報デザイン学科

学科長 寺井 秀一

【退職】

岩崎 博教授(電子光情報工学科)

平成十六年三月三十一日、定年退職。

【昇任】

藤田 智弘

平成十六年四月一日、電気電子工学科専任講師から電子情報デザイン学科助教授に昇任。

【新任】

小倉 武

平成十六年四月一日、電子情報デザイン学科教授に着任。

久保 幸弘

平成十六年四月一日、電気電子工学科専任講師に着任。

吉川 雅弥

平成十六年四月一日、電子情報

平成十六年四月一日、電子情報

デザイン学科任期制講師に着任。

計報

卒年 氏名

昭二六年 岩崎 隆男

昭二六年 竹口 良門

平 四年 桑原 達之

平成十六年一月二十六日

平成十五年十二月三十日

事務局便り

立命電友会会報二十三号の発行にあたり、ご寄稿いただきました会員の皆様にたいし、心より御礼申し上げます。

平成四年十一月に立命電友会が発足して以来、今年で十二年目となり、六月五日(土)に第四回総会を開催する予定です。是非、皆様のご出席をお願いします。

なお、住所等に変更がございましたら事務局までご連絡いただけますようお願いいたします。

立命電友会連絡先

〒五二五-八五七七

滋賀県草津市野路東一-一

立命館大学理工学部電子システム系内

立命電友会事務局 川畑 良尚

宮林(月・木)

電話 〇七七(五六一)二六六二

FAX 〇七七(五六一)二六六三

E-mail: denyukai@ml.ritsumei.ac.jp

http://www.ritsumei.ac.jp/se/re/denyukai/ (会報の題字は久保之俊氏)